

# 国外外来種チュウゴクスジエビの移入状況 ～ 2024 年現在について～

○内田 大貴<sup>1, 3</sup>・古旗 峻一<sup>2, 3</sup>・高野 季樹<sup>4</sup>

(1 株式会社 環境指標生物／ミュージアムパーク茨城県自然博物館 研究協力員

2 アジア航測 株式会社 3 埼玉県立自然の博物館 外部研究者 4 筑波大学大学院)

チュウゴクスジエビ *Palaemon sinensis* はテナガエビ科 Palaemonidae テナガエビ亜科 Palaemoninae に属する体長約 40 mm の小型甲殻類で、ロシア極東地域、中国およびミャンマーに自然分布する。日本国内においては 2005 年に静岡県のため池で初確認された国外外来種であり、現在までに東北から九州までの各地で、遺棄や逸脱に起因すると考えられる侵入が多数報告されている。国内では 2016 年に新たな輸入貿易制度による規制が始まるまで、釣り用や鑑賞魚用の生き餌としての利用を主な目的に、他のエビ類も含めた商品名の「シラサエビ」として輸入され、本種の生体が流通していたことが明らかとなっている。また、規制後も、在来種スジエビ *P. paucidens* の販売を目的とする採集時に本種が混獲され、スジエビに混ざるかたちで流通した事例の報告がある。本種は在来コエビ類との餌資源をめぐる競争や、生息空間の重複などの在来生態系への悪影響が懸念されているものの、スジエビと形態や色彩が酷似しているため、一般的に識別が難しく認知が進んでいないという課題がある。そのため、上述のような誤認による流通が生じているほか、野外での発見が遅れて報告時にはコエビ類の中で最も優占している事例も多く、外来種防除において重要な侵入の初期段階での対策や、分布状況の把握が十分にできていない可能性が考えられる。このような背景から、発表者らは、普及啓発のための簡易的な同定のポイントの紹介と 2024 年現在の国内における本種の侵入に関する情報の整理を未発表データも含めて行った。

侵入状況の整理の結果では、国内 30 都府県で野外水域への移入あるいは流通が確認され、国内各地へ広く拡散している現状が明らかとなった。近年は、本種が侵入した野外水域において、絶滅危惧種であるカワバタモロコ *Hemigrammocypripis neglectus* の減少など、在来の水生生物への強い悪影響を示唆する事例の報告も確認された。今後は、今回示したような簡易的な識別点を用いた一般の方々への普及啓発を行うことが重要である。加えて、生体の流通防止策、野外水域やビオトープ等への誤った放流の防止、非侵入水域でのモニタリングと予防的防除、侵入水域における防除の検討など、具体的な対策を早急に講じるべきである。



写真. チュウゴクスジエビ *Palaemon sinensis*  
(千葉県成田市産)